

堀辰雄、遠藤周作の書棚とフランソワ・モーリアック『蝮のからみあい』

―〈読書場〉のなかのテキスト―

渡部 麻実

一

本稿では、堀辰雄と遠藤周作の旧蔵書中、多量の書き入れが認められるフランソワ・モーリアックの小説『蝮のからみあい』（一九三三）を取り上げる。フランスを中心とする同時代の外国文学の動向に目を光らせていた堀は、いちはやく二十世紀文学の旗手としてのモーリアックに注目し、一九三〇年頃より、彼の小説論と小説に急速に親しんでいた。エッセイ「小説のことなど」（『新潮』一九三四年七月）で彼の小説論を紹介した堀は、それが提出する「仏蘭西小説の伝統を否定せず、それを英吉利や露西亜の作家―ことにドストエフスキイを受け入れること―によって豊富にすること。われわれの主人公に、生きた人間の不合理、不確かさ、複雑さを与へること、と同時にわれわれ民族の天性に従つて、構成し、秩序づけること」を、新たな小説（家）の課題として見据えていたようだ。管見のかぎり、『蝮のからみあい』に関する堀の最初の発言は、以下の一節である。

彼によつて提出された問題を、その後、仏蘭西で最も見事に解決したのは誰だらうかと考へて見る。さうして先づ第一に、それはモオリアック自身ではなかつたらうかと云ふ答案が浮ぶ。が、私

はさつきも言つたやうに、まだ彼の小説は「癩者への接吻」一篇きりしか読んでゐないのだ。もうすこし読んで見るまで、―少くとも彼の最大傑作であると定評のある、一昨年書いた「蝮のとぐろ」といふ小説を読んでしまふまで、―その答案は保留して置きたい。（前掲「小説のことなど」）

日本で、文学青年を中心にモーリアックへの関心が高まるのは、堀のこれら一連のエッセイに牽引されたところが大きい。^①右のエッセイは、日本では未だ文名の轟いていなかったモーリアックの存在と、その「最大傑作」が「蝮のとぐろ」であるとの定評を、日本に導入したものと見て注目される。

『蝮のからみあい』は、「わたし（ルイ）」の手記を内容とする第一部・第二部（全二〇章）を核に、ルイの死後に手記を読んだ息子ユベールが、妹ジュヌヴィエーヴに宛てた書簡、さらに、孫ジャンヌが母ジュヌヴィエーヴから祖父の手記を読むことを禁じられ、伯父ユベールに取り成しを頼む書簡が付属する中編小説である。つまり小説の大部分を、著名な法廷弁護士でボルドーの名士、殖財の才もあり富貴栄達を得たルイの手記が占める。富裕な農家出身の彼は、六八に達し心臓に持病を抱え、老いと死を意識しつつその孤独な生を振り返る。モーリアックの多くの小説と同様、これもボルドー地方を舞台に信仰の問題を通

奏させつつ、ブルジョワ社会と、そこに自己を定位し得ない登場人物に対する深い洞察を示している。

本稿では、書き込みを伴う堀辰雄と遠藤周作の旧蔵書から、『蝮のからみあい』を再構成する。テキストが読まれることによって意味を結ぶなら、それが誕生する場所は〈読書場〉だろう。〈読書場〉が再構成する、堀『蝮のからみあい』と遠藤『蝮のからみあい』を相互に、さらにモーリアック『蝮のからみあい』とも比較しながら読むことにより、それぞれの特徴を明らかにするとともに、『蝮のからみあい』を読む堀辰雄、あるいは遠藤周作という形で、〈作家〉たちをテキストから立ち上げてみたい。

二

本稿は、大量の書き込みを伴う二冊—François Mauriac, *Le neud de vipères* (Le livre moderne illustré : 231), illustrations de Roger Grillon, Ferenczi, 1935, Paris, Grasset c1932. (堀辰雄旧蔵書、神奈川近代文学館蔵)^②、鈴木健郎訳(新潮文庫)『蝮のからみあい』(一九五二年。遠藤周作旧蔵書、長崎市遠藤周作文学館蔵)^③を考察の主対象に据える。

堀が『蝮のからみあい』を繙いた時期は、一九三六年と推定できる。去年(一九三六年…引用者注)(略)君たちが、緑の木蔭にねころんで喋り合つてゐた傍らに、僕だけ一人すこし離れて、やはり同じやうに寝ころびながら読んでゐたモーリアックの『蝮のとぐろ』の幾つかの情景が、そのレムブラントの絵と混んがかり合ひながら(略)／その「蝮のとぐろ」の恐ろしい主人公は、いつも自分自身の外にばかりゐて、彼の家族を苦しめ、憎悪によつてのみ生き、その憎悪の裡にのみ自分の存在の意義を見出しながら老年

に達する。——しかし、彼は遂にその憎悪にも死に遅れるほどいたく年老いて、或日、目ざめる、彼が誤つて自分はそんな人間だと信じ切つてゐたものから本当の自分自身に目ざめる。……(堀辰雄「夏の手紙—立原道造に」(「新潮」一九三七年九月。原題「若き詩人への手紙—立原道造に」))

『蝮のからみあい』に対する遠藤の言及としては、「神々と神と」(「四季」一九四七年二月)が古い。

カトリック的恩寵グラチアの光について考えてみねばならぬのです。モーリアックの『蝮のからみあい』の中に主人公ルイの突然の回心がモーリアックの矛盾不調和な人間心理への探索の成功と共に、ルイの憎む妻イザの(彼女は決して良きカトリック信者ではありませんでした)祈りの秘蹟の効果がイザを越えて主人公ルイの主観を越えて働いたためであり、カトリックの「諸聖人の通好」という事のためであると考える必要はないのでしょうか。

ただし夥しい書き込みが認められる遠藤蔵書(新潮文庫)^④の刊行が一九五二年で、遠藤が結核により留学を切り上げフランスから帰国したのが一九五三年二月であることに鑑みると、『蝮のからみあい』が丁寧に繙かれた時期は、五三年以降と見るべきかもしれない。遠藤はエッセイ「モーリアックと私」(「朝日新聞」一九七〇年九月四日、夕刊)で、「三、四年前までは小説を書く前には彼の『テレーズ・デスケルウ』や『蝮のからみあい』を読みかえしては執筆前の呼吸を整えたことが何度か何度もあった」と述べている。また『蝮のからみあい』への関心が最晩年まで続いたことは、『深い河』創作日記「(三田文学)一九九七年八月)に「愛人は愛欲の世界からアガペに変る。(モーリアックの『蝮のからみあい』)」(一九九〇年八月二十九日)とあることから確認できる。新潮文庫『蝮のからみあい』は、この小説家に伴走するように、

彼の作家生活のなかにほとんどつねに存在していたのではないか。

さて、書き込みを伴って存在するものとしての堀あるいは遠藤蔵書『蝮のからみあい』とは、どのような物語なのか。それを問う準備として、各『蝮のからみあい』から、記号や施線を含む書き入れが見られるすべての本文ならびに書き込みを入力したデータを作成した。さらに、堀蔵書（原書）については、フランス語本文を入力したうえで、遠藤周作編『モーリヤック著作集』第三卷（春秋社、一九八二年）所収の中島公子訳（以下『著作集3』と略す）より該当する邦訳を追記した。蔵書に見られるフランス語による書き込みは、出典と既存の邦訳が確認できたものはそれを、それ以外は稿者による訳を追記した。これにより、使用言語の異なる二つのテキストを、日本語で比較できるようにした。また、各旧蔵書がモーリアック『蝮のからみあい』（以下、原テキストと称す）の特徴とどの程度一致、あるいは乖離しているかを確認するために、『著作集3』の邦訳を全文入力したデータもあわせて作成した。

以上、三つのテキストを比較し考察するにあたり、ユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://texmining.userlocal.jp/>) を用いた。解析用に文字コードEUC-JPで定義されていない文字や一部の記号を改めたほか、以下の修正や処理を行った。「わし」／「儂」等、閉じ・開きが語の抽出や解析の支障となりそうなものに、おもに平仮名を漢字に改める方向で手修正を加えた。邦訳によって読み方が異なる人名は、原則として『著作集3』の表記によって代表させた。たとえば、神父の名〈Ardouin〉が「アルドゥアン／アルドゥワン」となっているような場合である。その他、単語設定機能で、「ブレア街」等の固有名詞のほか、「どこ吹く風」等の分割させたくない特殊表現を一語として認識させる処理を行った。後者は、「どこ吹く風」が自然現象

〈風〉として解析されるのを避ける目的である。同じ目的で、本テキストに散見する「ルイ十三世風」等の、様式・方法を意味する〈風〰ふう〉は、すべて平仮名に開く手修正を行っている。さらに、「老人、老年、年寄り、老いの身、老いばれ」等の類義語や、「父さん、お父様、パパ」等の別称が基本的に同一の対象を示す場合（この場合はルイ）は、統合した。「父親」は、ごく少数の例外を除き、ルイではなく、ルイが弁護士として関わった人ないしルイの父親を指すため、統合対象に含めていない。また、ストップワードとして「いう、おく、しまう」等の補助動詞・補助形容詞類のほか、「思う」「わたし」（＝語り手）など、テキストの特徴を把握する指標になりにくく、他方で出現数が膨大な語を設定した。ちなみに「わたし」の出現は、原テキストで一五六九回、堀蔵書で四七四回、遠藤蔵書で一〇九回を数える。比率にすると七四対二二対四になるが、これと各テキストのサイズ比（原テキスト約一六万字、堀蔵書約四万七千字、遠藤蔵書約八千五百字。比率は七三対二二対五 ※堀蔵書は邦訳で換算）はきわめて近い。一人称代名詞を除くと、出現回数最多語は、親しい相手に対して用いる二人称代名詞〈*tu*〉となる。『蝮のからみあい』の大部分を、ルイがイザを宛先に想定して書いた手記が占めるため、〈*tu*〉はごく一部の例外を除きイザを指す。なお〈*je*〉について『著作集3』は「おまえ」、遠藤旧蔵書（鈴木健郎訳、新潮文庫）は「あなた」と訳している。

三

堀と遠藤、それぞれの書棚にある *Le neud de vipères* と『蝮のからみあい』（新潮文庫）は、どちらも同じ小説である以上、登場する事物やストーリーに違いはない。⁵⁾ところが、たとえばルイの婚外子「口

ベール」の出現数は、原テキスト四四回に対し、堀『蝮のからみあい』は三回、遠藤『蝮のからみあい』は二回となっている。もちろん、前節で示した、三つのテキスト間に存在するサイズ差は考慮しなければならない。原テキストに対する各蔵書のサイズは、堀が三〇パーセント、遠藤が五パーセント強なので、単純に数字のみで見れば、堀蔵書でのロベールの出現数は一三回程度あつてよい。ここからは堀『蝮のからみあい』で、ロベールの出現数が際立つて少ないことが具体的、客観的に可視化できる。

以上のような着想のもと、二つの〈読書場〉の『蝮のからみあい』にアプローチしてみたい。なお、こうした試行の動機の一つに、複数作家の〈読書場〉を横断し得る

広い視座の獲得に向けた、大規模文学テキストに対応可能な解析手法の検討があることは、ぜひ強調しておきたい。以下、堀蔵書、遠藤蔵書それぞれの特徴語の出現状況を視覚的に捉えてみる。ユーザーローカルテキストマイニングツールでは、ワードクラウドの表示を、統計的尺度 *t f i d f* を用いて算出したスコア（ある単語の重要度）順と、出現頻度順に切り替えられる。ここではデフォルトのスコア順で表示した。したがって、文字サイズはスコアに比例する。表示対象は名詞・動詞・形容詞類とした。

ワードクラウドによって小説の文脈を読むことはできないが、テキストの概観を把握するための一助に、これを用いることはできる。とくに、二つ以上のテキストを比較し、特徴の概要を客観的に把握するための一段階として、この方法は有用だろう。右の図は、堀と遠藤それぞれの『蝮のからみあい』について以下のような特徴を可視化する。

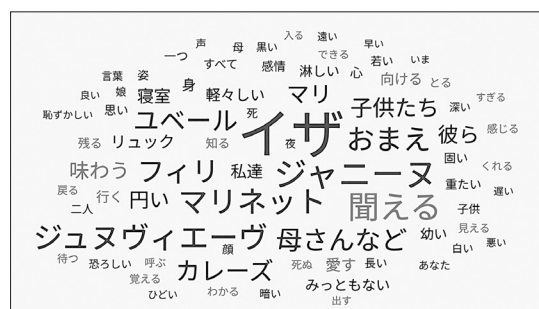


図1 堀蔵書

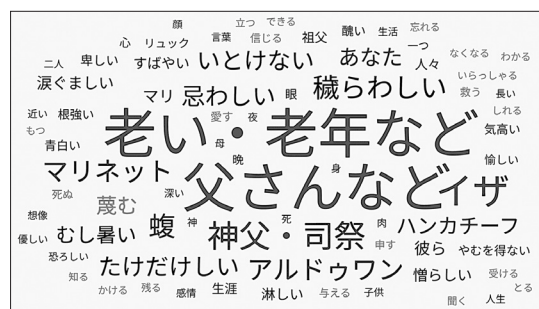
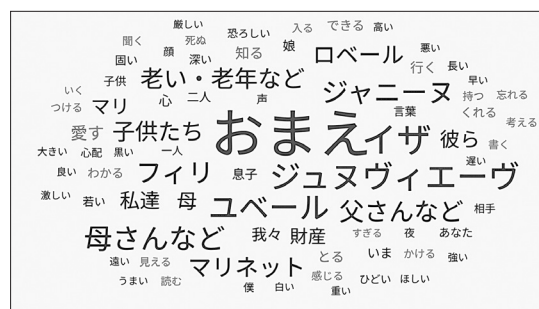


図2 遠藤蔵書



原テキスト

- (1) 堀蔵書では、遠藤蔵書や原テキストで高スコア（重要度）を示す「父さんなど」のスコアが低い。
 - (2) 遠藤蔵書では、堀蔵書や原テキストで高スコアを示すユベールとジュヌヴィエーヴのスコアが低い。
 - (3) 遠藤蔵書では、「神父・司祭」ならびに、神父の名「アルドゥワン」が高スコアを示している。
 - (4) 遠藤蔵書で「老い・老年など」が顕著な高スコアを示している。
 - (5) 堀蔵書のみ、「カルース」が高いスコアを示している。
- 右の特徴について、以下でテキストに接近しながら掘り下げてみたい。

特徴(1)は、堀蔵書が語り手ルイを視点とするのに対し、遠藤蔵書は、少なからずルイとイザの子供たちの視点を取っていることを示唆する。「父さん／お父様／パパ」は、子供たちがルイに呼びかける際、またはルイを除け者にしてなされる家族の会話やユベール書簡のなかに出現する。(2)も、堀蔵書の視点がルイに集中しているのに対し、遠藤蔵書が、ルイの子供たちの視点を多く採用していることを示唆している。たとえばユベールの出現は、原テクストの八五回に対し、遠藤蔵書には二回しか登場しない。遠藤におけるユベールの出現数の少なさは、これが少なからずユベールの視点―ルイの手記中のユベールの発言や、ユベール書簡―を採用していることを意味すると解釈できる。例として遠藤蔵書から、「父さん」が多出する箇所を挙げる。

父さんのことを、どんな風に考えているにもせよ、また、父さんがこの手記で、恐ろしい感情を見せびらかしているにもせよ、とにかく父さんの、気高いとはいえないまでも、要するに、人間らしい姿が、この手記によつて窺えることは否めないからです。(特に、妹のマリや従妹のリユックに対する、父さんの愛情の涙ぐましい証拠が、この手記に見られますよ。)母さんの柩の前で父さんが見せた悲しみには(以下略)〔*「柩の前」に黒鉛筆でオーバーライン〕(遠藤蔵書二二五ページ、ユベール書簡)

ユベールは、ルイの生前、彼を禁治産者にすることでその財産を得る策略を、妹とその夫、姪とその夫らとともに巡らせていた。他方で、夫の謀略に呆れを示す妻や、行き過ぎを窘める母イザなどの存在は、それを等閑視するユベールの心理に働きかけ、自己を正当化できる根拠を欲しがらせた。ゆえに彼は、父が死の間際まで書き続けたこの手記に、父の心神喪失の証拠を見出そうとする。ユベールが妹宛に書いた右の書簡は、「父さんがなかば発狂していたことはもうわれわれのあ

いだでは疑えない事実だ」この手記の行間に滲み出ているのはきわめて特徴的な精神錯乱」だ、というようにユベールの父に対する無理解を上塗りし、かつその解釈の路線上に妹を誘導する。ユベールは父の手記を禁書のごとく扱い、「このノートは破つてくれ。だれにも口外しないこと。われわれ二人のあいだでももう決して口にはのぼらせないこと」と妹に命じるのだ。早世した末娘マリを除き、父としてのルイに子の立場で呼びかけるのがユベールとその妹ジュヌヴィエーヴにほかならない以上、「父さんなど」が高スコアを示すテクストは、ルイの孤独な魂に寄り添うものにはなり得ない。

堀蔵書のようにルイの視点を取ること、あるいは逆に、遠藤蔵書のように子供たちの視点を多く取り入れるということは、総じて二つのテクストをどのように異ならせるのだろうか。後者の場合、さきに引用したユベール書簡が端的に示すように、子供たちのうちに蟠った父への不満、憎悪が強調され、家族の争闘の物語の様相をより強く帯びる。モーリアック『蝮のからみあい』は、嫡子・嫡孫とその姻族たちに莫大な財産を譲らないことによつて、自分を除け者にした家族に復讐しようとするルイと、その莫大な財産を手に入れるために連帯し、陰謀を巡らせる家族との争闘を描く。遠藤『蝮のからみあい』が堀のそれに比し、こうした争闘の色彩を濃く帯びているであろうことは、前傾の図で、「穢らわしい」「忌わしい」等の形容詞のスコアが顕著に高いこととも符合する。

対して堀蔵書は、敵対する家族への憎悪とともに、家族たちからは見えない、ルイの心情その他を多く描き出す。

… je sais ce que c'est que d'être un damné sur la terre, un réprouvé, un homme qui, où qu'il aille, fait fausse route ; un homme dont la route a toujours été fausse ; quelqu'un qui ne sait pas vivre, non

pas comme l'entendent les gens du monde : quelqu'un qui manque de savoir-vivre, au sens absolu. [*下線茶鉛筆] (堀蔵書七八〜七九頁、第一部X章) / この地上で呪われた者、弾き出された者となることが、いったいどんな気持ちのものかはわかる。どこへ向かうにしても方向をまちがえてしまふ人間、いつも誤った道を辿っている人間、この世に生きて行くすべを知らぬ——といっても世間一般で言う意味とはことなり、絶対的な意味において生きるすべを知らぬ者。[『著作集3』七六頁]

右のように、ルイの視点で切り取られた物語は、家族から除け者にされた老人が、除け者にした家族を憎むと同時に、除け者になった自分自身の生き方と性質を振り返る物語となる。自分という人間それ自体と、自己と家族との関係性を振り返るなかで、ルイはあり得た可能性を分析し、それによって家族が抱くルイ像の更新を果たそうとする。ゆえに予定外のイザの急死によりルイは、「Les choses en resteraient éternellement au point où je les avais laissées en quittant Calèse. Nous ne pourrions pas recommencer, repartir sur nouveaux frais : elle était morte sans me connaître, sans savoir que je n'étais pas seulement ce monstre, ce bourreau, et qu'il existait un autre homme en moi. / 一切の物事はわたしがカレーズを離れるときのこして行つた地点で永久に静止することになるのだ。やり直すこと、新規まき直しに出直すことは不可能だ。イザはわたしというものを知らぬまま、わたしがただの人でなし、冷血漢というわけではないことを、わたしのなかに別な人間が住んでいることを知らぬまま、あの世へ行ってしまった。」[*下線茶鉛筆。茶鉛筆で側線] (堀蔵書一二七頁 / 『著作集3』一二五頁) と嘆く。この件に関し、堀蔵書は「*Mais la mort inattendue de sa femme bouleverse ses dispositions. Il voit une fois de plus à quel point ses*

enfants sont indignés, car, malgré le désir très vif de la mourante, ils n'ont pas averti de son agonie le père alors à Paris et dont ils savaient l'adresse par la trahison de Robert le bâlard. Mais ils préféraient que la mère fût déçue dans son dernier désir plutôt que de révéler eux-mêmes leur secrète connivence avec Robert / ☆しかし予期せぬ妻の死が彼の気持ちを混乱させる。彼は、子供たちがどれほど憤慨しているか改めて眺める、というのは、死の間際にいる母の強い希望に反して彼らが、庶子ロベールの裏切りによってアドレスを知っていたにもかかわらず、彼女の臨終をパリにいる父親に知らせなかったからだ。だがもしも彼らがロベールとの秘密の共謀を彼ら自身で暴露してしまうことよりも、母親の最後の望みが実現しないことのほうをむしろ良しとしたのであれば(引用者訳)「[*黒鉛筆] (堀蔵書一二六頁＝白紙頁⁶)と記す。ユベールらに財産を譲らないためにパリに出かけていたルイは、妻の臨終に間に合わない。ルイの所在を正確に知りながら子供たちが、電報を局留めにしたからだ。しかし帰宅したルイは、死の床にあるイザが、ルイを執拗に呼び戻すよう子らに願っていたことを知る。このように、ルイの内部で、自己自身と家族に対する彼の洞察が無限に更新されていく。

イザの急死によって、関係性の更新を願うルイの思い、彼の手記の宛先は失われた。だがその後、孫娘ジャニーヌが夫に捨てられ、自ら望んでルイの家に身を寄せることで、物語は新たに動き出す。ルイの悲痛な自己認識は、自分を必要とする者の存在により、理解者を得られるかもしれない希望で修正される。こうしてルイは、受け取り手をジャニーヌに変え再び筆を執る。そして、堀旧蔵書は、手記をしたためながら亡くなったルイの臨終の件で幕を下ろす。その余白には

☆ *Il meurt à l'instant où il va prononcer le nom de celui dont lui*

vient cette soirée d'amour. / ☆彼はこの愛の晩に彼にもたらされたその名を發しようとする瞬間に死ぬ(引用者訳)〔※青鉛筆、黒鉛筆〕(堀蔵書一五三頁)と記されている。

ルイの死で閉じる堀蔵書に対し、遠藤蔵書は以下の件で幕を下ろす。

亡くなる前々日に、お祖父さまは、御自分にその(聖体拝領の引用者注)資格のないことを苦になさつて、クリスマスまで待つ決心をしたという意味のことを、くり返しておられました。どういう理由で叔父さまは私の申すことを信用して下さらないのですか。

〔※傍線黒鉛筆。「叔父さま」までの箇所は黒鉛筆でオーバーライン〕(遠藤旧蔵書二二二―二三三頁、ジャーニヌ書簡)

以上のように、遠藤の〈読書場〉では、ルイの死後も、彼と彼の家族たちとの関係性の劇が更新されていく。そのなかで、堀蔵書では固定されていた先立つ者と先立たれる者(ルイ)との構図も更新され、先立つ者(ルイ)と先立たれる者(ジャーニヌ)という新たな関係性が描かれる。総じて堀蔵書は孤独な喪失者の内省の記としての印象が強く、遠藤蔵書は、そうした要素も持ちつつ、争闘を基調とする家族の関係性の劇という印象が強く押し出されている。

* * *

特徴(3)に示したように、遠藤蔵書では「神父・司祭」ならびに神父の名「アルドゥワン」のスコアが高い。なお『著作集3』は、原則として「prêtre / curé」を「司祭」、「abbé」を「神父」と訳しているが、遠藤蔵書は、前者も「神父」と訳している例が多い。ここではそれらをまとめて「神父・司祭」として扱う。以下に、遠藤蔵書のみに見られる「神父・司祭」の出現例を挙げる。

「あなた(アルノザン医師…引用者注)という方は、アルドゥアン神父様と同じことで、悪というものの信じられない方なんです。」

／床の中で、私はひとりで笑っていた。あなた(イザ…引用者注)がもどつて来て、そのわけをたずねた。私は二人の間でふだんに使われる、「何でもないよ。」という言葉で答えた。――何を笑っているの? ――何も。〔※黒鉛筆でオーバーライン〕(遠藤蔵書一一〇頁、第I部IX章)

アルドゥアン神父は、その清らかさ、高潔さによつてルイに影響を及ぼす人物だが、右のシーンでは、アルノザン医師の高潔さを表現するための譬えとして、名前のみ登場している。

叔父さまが、どうしてこの神父さまの御意見を叩こうとなさらないのか、私にはわけがわかりません。母の言うことによりますと、お祖父さまが生活上の些細なできごとまで書き留めていらつしやるこの日記で、この会見については一言も触れていない――もしこの会見が、お祖父さまの運命を左右する動機となつたようなら、このことを書き洩らすはずがないと申すのです。〔※黒鉛筆でオーバーライン〕(遠藤蔵書二二二頁、ジャーニヌ書簡)

夫に捨てられたジャーニヌは、彼女の属していたブルジョワ階級の価値観や形式化した信仰のあり方に疑問を抱きはじめ、家族のなかで誰一人理解する者のなかった祖父に対し、新たな解釈を加えていく。冷酷な守銭奴のイメージに精神錯乱者という評価を追加し、ルイを批判するユベールの見解を、ジャーニヌの書簡が異なる解釈によつて上書きする。このように原テキストや遠藤蔵書では、ルイの死後も、彼と遺族との関係、彼と神(信仰)との関係が更新される。

なお、「神父」以外に遠藤蔵書でのみ高スコアを示すものに、「蝮」とそれに共起する「穢らわしい」、また「ハンカチーフ」がある。ところが「蝮」は原テキストの出現数九回に対し、堀蔵書にはそれを上回

る一〇回の出現が認められる。遠藤蔵書にも五回登場するので、テキストのサイズ差を考慮すると、遠藤蔵書における「蝮」の重要度はたしかに高い。ただし、自筆の書き込みに〈vipère〉を含むことで原テキスト以上に「蝮」が出現する堀蔵書も、「蝮」の重要度が高いと考えるべきだろう。堀蔵書では、自己の性情を分析し、自らを「蝮」に譬えるルイの悲劇的な自己卑下と、ユベールらの陰謀を知り、「蝮」もはわたしから抜け出し」外でとぐろを巻いていると認識を改める、ルイの自己意識の遷移とが、「蝮」のイメージを借りて立体的に浮かび上がる。同様に「ハンカチーフ」も、原テキストに出現する七回すべてが、堀蔵書にも出現する。サイズの大きい堀蔵書では、出現数一〇回以下の語は何であれ、重要度が高いものと見なされていない。小説から切り出されたデータは、元のまったき小説に戻すことなしに解釈できない。

* * *

特徴(4)に示したように、遠藤蔵書では「古い・老年など」のスコアが顕著に高い。『蝮のからみあい』の本編は、古いと病により死を意識するルイが、自分の死後、手記をイザが目にすることを想像するシーンで始まり、手記を書きつつルイが落命し、その執筆が途絶えた瞬間で終わる。ルイの手記には、老いたルイ自身の境遇として、あるいは彼が弁護士として関わった事件に関連して、老いて居場所を持たない孤独な老人の姿が盛んに描き出されている。〈古い〉のスコアがきわめて高い遠藤『蝮のからみあい』は、〈古い〉によって始まるテキストでさえある。そこでは、本編開始以前にあたる扉等に、「老年 64」「古いのみじめさ p176」「老年について、p64」〔※黒鉛筆〕の書き込みが見出せるのだ。遠藤蔵書から、〈古い〉に関連する記述をいくつか拾ってみた。

彼（ジャーヌの夫：引用者注）らには、老年がどんなものかわからないのだ。人生からは何も得られず、また、死からは何も期待し得ないという刑罰、そんなものは、あなた方には想像できない。人生の彼方に何もならないなんて、説得もなく、謎の言葉も与えられないなんて……。〔※黒鉛筆でオーバーライン〕（遠藤蔵書六四頁、第一部V章）

ここでは、次第に社会が自分と無関係なものになっていく感覚に関連して、〈古い〉が語られている。ルイを老いさせるのは、彼の年齢や病に限らない。

古いの惨めさ、これは人生の総決算、数字一つも変えることのできない総和である。私は六十年をかけて、この憎悪に悶える老人を造り上げた。現在の私以外に私というものはあり得ない。生れかわるよりほかはないのだが。おお、神よ……神いまさば！〔※

黒鉛筆で三重のオーバーライン〕（遠藤蔵書一七六頁、第二部XVII章）

『蝮のからみあい』は〈古いの惨めさ〉を右のように定義する。〈古い〉の恐怖と困惑は、キリスト者や教会への憎悪を剥き出しにしてきたルイを、神に近づけるような内的衝迫^{interpellation}を伴う。〈古い〉は避けられない。そして若者は〈古い〉の経験を先取れない。ゆえに一人の理解者を得たいと願うルイにとって、〈古い〉は越えられない壁である。だがそれはイザにもあてはまる。イザは、ルイに対抗すべく深夜まで策を練る息子や孫たちの気焰を持て余し、子供らもまた、労りその他の理由から、ルイを共通の敵とする家族同盟の外にイザを置き始める。こうして、ルイとイザの関係性が〈古い〉の自覚の共有によって更新される可能性が、テキストに持ち込まれる。だがそれは、イザの急死により実現しなかった可能性でもある。

* * *

特徴(5)に挙げた「カレーズ」は、『蝮のからみあい』の主要な舞台でもあるルイの故郷である。原テキストに三八回、堀蔵書に一七回、遠藤蔵書に二回の出現を見る。テキストのサイズ差に鑑みても、カレーズの頻出は堀蔵書の特徴づける要素と言える。以下、堀蔵書から「カレーズ」の登場例を挙げる。

Cette nuit, (...) dans le tumulte d'un vent furieux, j'ai relu ces dernières pages, stupéfait par ces bas-fonds en moi qu'elles éclairaient. Avant d'écrire, je me suis accoudé à la fenêtre. Le vent était tombé. Calèse dormait dans un souffle et sous toutes les étoiles. Et soudain, vers trois heures après minuit, de nouveau cette bourrasque, ces roulements dans le ciel, ces lourdes gouttes glacées. Elles claquaient sur les tuiles au point que j'ai eu peur de la grêle ; j'ai cru que mon cœur s'arrêtait. [*下線茶鉛筆、茶鉛筆で側線] (堀蔵書八四頁、第一部XI節) / 今夜(略)荒れくる風の唸りのなかで、このノートのおしまいの方を、そこに映し出されたわたしの心の底なるものに呆れながら読み返した。ペンをとるまえに窓辺に肘をついた。風のいきおいは衰えていた。カレーズは微風に包まれ、満天の星のもとに眠っていた。それからまもなく三時になろうというころ、またも突如としてあの突風、天をとよめす唸り、凍った重たい雨滴がおそってきた。雹ではないかと心配したほどはげしく屋根瓦に当たった。心臓がとまるかと思った。『著作集3』八三頁)

以下の一節は、章番号が茶鉛筆で囲われ、かつ「Calèse」に青鉛筆で下線が付されている。

XV[*囲み茶鉛筆]／Calèse. [*下線青鉛筆]／À travers la vitre où une mouche se cogne, je regarde les coteaux engourdis. Le vent

tire en gémissant des nuées pesantes dont l'ombre glisse sur la plaine. Ce silence de mort signifie l'attente universelle du premier grondement. « La vigne a peur... » a dit Marie, un triste jour d'été dil y a trente ans, pareil à celui-ci. [*茶鉛筆で側線] (堀蔵書一一〇頁、第二部XV章) / 蠅のぶつかる窓ガラスごしに、わたしは立ちすくむ丘陵のたたずまいを眺めている。唸りをあげて風が重たい雲を引っぱり、その影が滑るように草原のうえを流れている。死んだような静寂は、下界が雷鳴の轟きを待ちかまえているしるしだ。「葡萄畑は恐がっているのね……」と、今日とよく似た三十年まえの夏の重苦しい日、マリは言ったものだ。『著作集2』一〇九～一一〇頁)

A peine la vigne at-elle « passé fleur » ; la future récolte couvre le coteau ; mais il semble qu'elle soit là comme ces jeunes bêtes que le chasseur attache et abandonne dans les ténèbres pour attirer les fauves ; des nuées grondantes tournent autour des vignes offertes. [*鉛筆で側線] (堀蔵書八四頁、第一部I章) / 葡萄は「花をすぎ」たばかりだ。やがて収穫されるものが丘陵を覆っていた。だがそれも、野獣の囃にと獵師が繋いだまま闇にうつちやっておく若い獣のように、そこに置かれていたといった趣きだ。怒号する黒雲が人身御供の葡萄畑のまわりをまわっている。『著作集3』八五頁)

ボルドー南部に広がる曠野に存するカレーズにルイは、両親から受け継いだ広大な山林やブドウ畑を所有する。「カレーズ」の出現頻度の高さは、堀『蝮のからみあい』に占める〈自然描写〉の割合が、他の二つよりも高いことを物語る。なかでも注目すべきは、そのなかでしばしば〈風〉が描かれていることだ。〈風〉の語を登場させずに風を

表現する例も少なくないが、〈風〉が語として出現する例に限っても、原テクスト一九回中の約八割にあたる一五回の〈風〉が、堀蔵書に出現する。遠藤蔵書には一度しか出てこない。さらに堀蔵書からもう一か所、〈風〉を引用してみたい。

Je n'osai protester que moi, depuis des années, je sentais vivre mon enfant, je la respirais ; qu'elle traversait souvent ma vie ténébreuse, d'un brusque souf⁷le. [*下線茶鉛筆。茶鉛筆で側線] (堀蔵書一〇〇～一〇一頁、第Ⅱ部XⅢ章) / わたしの方ではここ何年来あの子の生きていることが感じられ、その気配を呼吸している。暗いわたしの人生をしばしば一陣の風にのってあの子が横切ることがある、とわたしはあえて口に出して言い返しかねた。 (『著作

集3』一〇〇頁)

ここから堀の小説『風立ちぬ』(野田書房、一九三八年)を想起しないのは難しい。堀の小説に登場する〈風〉は、モーリアックに由来するところが大きいと稿者は考えている。⁷しかし両者には決定的な違いもある。すなわち、『蝮のからみあい』では、「パパのために」と祈りながら亡くなった末娘マリが、「風にのって」「横切る」のを感じ、それがルイの立ち直りと救済に助力するのに対し、節子を失った「私」を立ち上がらせる〈風〉は、『風立ちぬ』では吹いていない。⁸堀蔵書の冒頭、エピグラフに、以下の書き入れが見られる。

« Le Nœud de vipères » est, en apparence, un drame de famille, mais, dans son fond, c'est l'histoire d'une remontée. Je m'efforce de remonter le cours d'une destinée boueuse et d'atteindre à la source toute pure. Le livre finit lorsque j'ai restitué à mon héros, à ce fils des ténèbres, ses droits à la lumière, à l'amour et, d'un mot, à Dieu. [*黒鉛筆。下線は黒鉛筆、青鉛筆] (堀蔵書「エピグラ

フ) / 『蝮のからみあい』は、一見、家庭の葛藤を扱っているように見えるが、根本においては、ひとつの立ち直りの物語である。私は、ある泥にまみれた運命の流れを遡って、澄みきった水源に達しようと努力する。作品は、私が、私の主人公、この闇の子に、光源と愛への一言にして言えば神への彼の権利を回復してやめた時に終る。(『小説家と作中人物』『モーリヤック著作集2』三四二頁) しかし『風立ちぬ』には、神にルイの祈りを取り次ぐ聖なる者(マリ)が存在しない。遠藤が『蝮のからみあい』に言及した「神々と神と」(前掲)にも記されていた「諸聖人との通好」、神の摂理による助力は、位相の異なる『風立ちぬ』では作動できない。

四

以上本稿では、三つの『蝮のからみあい』を比較し、あわせて『蝮のからみあい』を読む作家たちへの接近を試行した。さいごに、上述の結論とは別に、文学テクストの機械処理(解体)のほんのさわりでしかない試みをとおして、それでも見えてきたことについて触れておきたい。

ルイの手記に、以下の一節が含まれる。書き込みのある堀旧蔵書から引用する。

Moi qui déteste les cimetières, je vais quelquefois sur sa tombe. Je n'y apporte pas de fleurs depuis que je me suis aperçu qu'on les vole. Les pauvres viennent chiper les roses des riches pour le compte de leurs morts. Il faudrait faire la dépense d'une grille ; mais tout est si cher maintenant. [*下線茶鉛筆。茶鉛筆で側線] (堀蔵書八三頁、第Ⅰ部XⅢ章) / 墓場のきらいなわたしは、母の墓には

ときどき行く。花は、盗まれるのに気づいてからというものを持って行かないことにしている。貧乏人どもが手前どもの死者のために金持ちのバラを失敬しにやってくるのだ。鉄柵をひとつ奮発しなくてはと思うのだが、当節は何によらず諸式が上がっていて。

〔著作集3〕八二頁

このテキストは、孫娘の夫フィリから「老いばれわに」と綽名されるほど、度の過ぎた守銭奴だと周囲から見做されてきたルイの吝嗇ぶりを補強する。だが同じテキストは、妻イザに宛てた手記のなかに配置されているというコンテキストをふまえることで、彼の愛情と、無駄を徹底して省こうとする合理性とが、まったく別の地平に位置することを示し、妻にそういう自分についての理解を希求するルイ像を立ち上がらせる。右の件が、「リュックには墓がない。あの子は消えてなくなった。行方不明の戦死者だ。」を直列させているというコンテキストを踏まえることにより、テキストの意味はさらに更新される。

重要なのは、こうした要素が響き合い、からみあうことによってルイが形作られるということだ。彼は、ほどかれたコードのなか、単語のなかには存在しない。解体されたコードを小説それ自体に返還する手続きがいつも必ず求められる。それを欠いた研究は、小説の研究とは違う何か別のものになってしまう。

注

(1) 中村真一郎「もう一人のモオリヤック」(加藤周一・中村真一郎・福永武彦共著『1946文学的考察』真善美社、一九四七)、遠藤周作「私の愛した

小説」〔新潮〕一九八三年一〇月〜八四年十一月。原題「宗教と文学の谷間で」等を参照。

(2) 購入元シール「MITSUKOSHILTD/BOOK DEPARTMENT/TOKYO, JAPAN」書店票「Takenaka/USHIGOME/TOKYO」の貼付が認められる。

(3) 二人の旧蔵書中、書き込みを伴う『蝮のからみあい』としては、遠藤蔵書にもう一冊—François Mauriac: *Oeuvres complètes* Tome II. Paris, A. Fayard, 1951 (町田市民文学館)とほらんど蔵)認められる。三〜五章にわずかな施線が見られるほか黒鉛筆で「訳40頁」と書き込まれている。「訳40頁」と書かれた一節に相当する邦訳が、鈴木訳『蝮のからみあい』の四〇頁に見出せる。

(4) 鈴木健郎による『蝮のからみあい』の邦訳は、新潮文庫以前にも『遺書』のタイトルで筑摩書房から一九四一年に上梓されている。

(5) 厳密には、原語と邦訳の違いによる差が存在する。たとえば、*Le neud de vieilles* における〈enfants〉は「倅ども」「子ら」など複数の日本語で訳されている。

(6) 旧蔵書からの引用中、イタリック体は堀または遠藤による書き込みを示す。アクセント記号の脱落が見られる場合があるが、そのまま引用している。

(7) 拙稿「堀辰雄、遠藤周作と『愛の沙(砂)漠』、あるいは『風立ちぬ』『菜穂子』と風の物語」〔近代作家旧蔵書研究会 年報〕二〇二五年三月)を参照。

(8) 拙稿「『風立ちぬ』——一つの転換点、あるいはアンドレ・ジイドの『背徳者』的死生観との決別」〔流動するテキスト 堀辰雄』翰林書房、二〇〇八)参照。

付記

本稿は、日本近代文学会六月例会《特集》「デジタル・ヒューマニティーズと文学研究のこれから」(二〇二二年六月)における口頭報告「読書場を読む——資料採掘・データ化・文学館——」を発端とする。調査にあたりご協力くださった神奈川近代文学館、長崎県立遠藤周作文学館、町田市民文学館ことばらんど、並びに遠藤龍之介氏に深く感謝申し上げる。

(日本女子大学文学部教授)

